

建物を楽しむために

【建物を見るコツ】

古い建物は見るだけで楽しいものです。旅先や、あるいはいつもの街並みの中で良い建物を見つけた時は、まるで大切なからものを手に入れたような気分になります。

建物を楽しむ手段はひとそれぞれですが、あえてガイドラインを紹介するのなら、まずは建物の周りの状況を眺めてみてください。なぜそこにその建物がたっているのかを、道路や街並みをヒントに探ってみましょう。

それから、建物をじっと見つめて、建物に漂っている雰囲気をじっくり感じてみましょう。もし上手くいかない時は、ディテール(細部)を目で追いかけてみてください。なんとなく感じていた雰囲気は、色味が理由かもしれませんし、細部に施された装飾が原因かもしれません。

雰囲気を味わえるようになったら、建物のたどってきた物語へ想像の翼を広げてみましょう。年代や様式、デザイン、構造の種類などの知識があれば、より鮮明に想像することができます。所有者やガイドボランティアから話を聞くことも役に立つでしょう。

建物を理解するうちに、その建物を大好きになっていけば、あなたはもう立派な建築マニアです。

【良い建築の3つの要素】

建築の世界では、良い建築は「用・強・美」の3つの要素を満たすものであるといわれています。「用」は機能的であること、「強」は構造的な強度、「美」は見た目の美しさをさします。

本書で紹介する学校の建物の多くは、「用」に重きをおいています。採光と換気に適した片廊下型や、基準寸法で定められた教室の大きさなどは、最たるポイントでしょう。「強」については、自然災害の教訓から鉄筋コンクリート造の頑丈な校舎を早くから採り入れてきました。

ただ「美」については、必ずしも追求されていたとはいえません。ですが、年月を経た建物は風雨にさらされることで風合いを帯び、「侘び寂び」に通じる美しさを感じさせ、学校の建物を良い建築へと仕上げています。

【建築マニアの嗜み】

建物はそれを使用し管理する所有者がいて、はじめて姿を保つことができます。見学する際には建物へのいたわりの心を持って、大切に扱いましょ。また、中には見学のできない建物もあります。そういった場合は無理をしないこと。じっくり機会を待てばいつか見ることができ、その日を信じて無茶をしないことも、建築マニアの嗜みなのです。

小・中学校

小学校は明治5年に公布された「学制」により、愛知県内に600校を設ける計画が立てられた。当時は尋常小学校といい、尋常とは普通を意味した。昭和16年から22年まで国民学校に変更された。



photo:nawoko kato

教室棟外観。青空と深い緑に囲まれて、赤い銅板瓦がひときわ目を惹く

田峯小学校(普通教室棟／特別教室棟)

伝統芸能を継承する、県内唯一の現役の古い木造校舎



北側廊下。竿縁天井が奥行きを与えている

徳川と武田の争いに巻き込まれ、騒乱の地となった田峯城跡や、城主の菅沼貞吉が1470年に勧請した田峰観音が今に残されています。

県内唯一の現役の古い木造校舎

田峯小学校は、田峰観音近くの山の中腹にあります。赤い銅板瓦と焦げ茶色の下見板、白い窓枠の木造校舎が水平に伸び、ひらかれた校庭から見渡せば、遠く続く峰々が広がっています。

田峯小学校は、明治6年に第15番小学田峯校として開校し、現在地へは昭和2年に移転、現校舎もその時に建てられました。以来90年



教室の風景。照明を消しても明るい

以上使用され続け、平成23年には瓦の葺き替えと耐震補強を施すなどの大規模な改修が行われました。

普通教室棟は、南側の校庭に面して教室を配置し、廊下を北側におく片廊下型です。また特別教室棟は、校庭をL字に囲うように配置されています。大きく開かれた窓は、採光と換気を目的としています。

長さ65mの普通教室棟の中心の玄関ポーチには「學」の字が入った鬼瓦がのり、懸魚にはピンク色のねじり梅模様があしらわれています。

また、北側を通る長い廊下では、雨天時に朝礼なども行われていたそうです。教室内は、採光と換気のため天井が高く、そのため室内は照明なしでも明るく、清潔な空気が循環しています。

児童数10名程度の小さな学校ですが、子どもたちが制作した習字や絵画がいたるところに飾られ、賑やかな雰囲気が漂っています。

青い目の人形と子ども歌舞伎

田峯小学校には、昭和2年にアメリカとの友好の証に交換された、グレースという青い目の人形が大切に保管されています。人形は、太平洋戦争の激化に伴い焼却命令が出され

奥三河と田峯地区

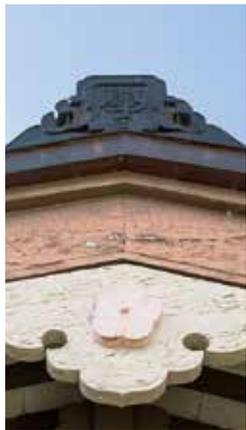
緑深い山間部には今も古いしきたりや習俗が残し、それにまつわる祭祀が行われています。奥三河地方の山間部にある田峯小学校は、そんな祭祀と深く関わっている興味深い小学校です。

奥三河は恵那山や木曾山脈に連なる山々に囲まれ、田峯の里もそこにあります。標高400メートルほどの頂きには、戦国時代に

したが、ひっそりと隠されて戦禍を免れました。それが戦後に再発見されると、地域住民の尽力で故郷のオハイオ州デイトン市へ里帰りを果たしました。

田峯地区では、田峰観音に奉納する田楽や地歌舞伎が古くから伝わり、小学校に通う子どもたちは歌舞伎を奉納するため、年始になると厳しい練習に打ち込みます。それら課外学習は、地域住人と親たちの手厚いサポートで成し遂げられています。

地元の歴史や文化を尊び、その核となる小学校を大人たちが支える姿に、学校の本質を見る思いがします。



玄関ポーチの鬼瓦とねじり梅模様

1927年(昭和2年) / 2011年(平成23年)改修
木造平屋建て
【設計】不明
北設楽郡設楽町田峯字下畑9他



芝居小屋内部。谷高座は歌舞伎座保存会の名称

内には仮設の芝居小屋が建てられます。小屋には花道と棧敷が作られ、茅葺屋根の舞台と連結されます。天井は竹を縄で結わえてアーチ状に組み、それを丸太で架け渡された梁から吊り下げて作られています。その上をシートで覆って芝居小屋が完成します。小屋には200人以上が入場でき、寒風が吹くたびに風に煽られてたわむ屋根と底冷えのする場内は、独特の風情があります。

子ども歌舞伎を育てるもの

地歌舞伎のもうひとつの目玉が、子ども歌舞伎です。田峯小学校の子ども達が地元の人々の教えを受け、年明けから練習に打ち込んで舞台上に挑みます。

演目が始まる前には新入生のお披露目もあり、また演目によって上級生と下級生それぞれに見せ場が用意されているのも特徴です。限取の施された子どもたちが見得を切ると、客席からかけ声がかかり、温かい拍手とともにたくさんのおひねりが宙を舞うのも地歌舞伎の良さです。

それら伝統芸能は、村を支える文化として大切に継承される一方、地元の人々の根幹に



文化財に指定されている地歌舞伎舞台



photo: Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto

子ども歌舞伎のようす。掛け声とともにおひねりが宙を舞う

特集1

田峰観音と子ども歌舞伎

田峰観音と田峯・地歌舞伎

田峯地区では、毎年2月の第2週の週末に、五穀豊穡を祈る田峯と地歌舞伎を田峰観音に奉納する例祭が行われます。

田峰観音は、1470年田峯城築城の折に、城主菅沼定信が鎮護のために勧請したといわれています。また田峯田峯は、一年の農作業を模して楽や舞を行う伝統芸能で、約460年の歴史があり、国の重要無形民俗文化財に指定されています。一方地歌舞伎は、江戸時代に村を救った霊験を観音様に感謝し、370年以上奉納され続けてきた芝居です。

例祭の日にはたくさんのおひねりが立ち、境



芝居小屋の外観。奥の茅葺屋根が地歌舞伎舞台

は、子どもの成長をみんなで見守る姿が強く感じられます。そんな、昔ながらの日本のコミュニケーションが今も残されていることに、深い感動を覚えます。



田峯地区と
田峰観音では
漢字が違ふんです。
「だみね」とにころのと
同じく、なぜかは
分かってない
らしいです。



photo: Sayaka Ito/minachom/H. Kumamoto

教室内部。天井や床板、窓枠など木製のしつらえに包まれた優しい空間

豊橋市民俗資料収蔵室本棟 (旧多米小学校本校舎)

懐かしい教室風景の残る、旧木造校舎

懐かしい風景

木製の戸をガラリと開ければ、そこには多くの人が思い浮かべる懐かしい教室の風景が広がっています。

豊橋市内を走る路面電車の赤岩口停留場から東へ2キロ。かつて多米小学校だった木造校舎は、民俗資料収蔵室として使用されています。

片廊下型で標準的な大きさの校舎内には、古い農機具や養蚕の道具をはじめ、ミシヤ



外観。よく手入れされた裏庭

ポンポン時計、高度成長期の象徴だったブラウン管テレビなどが、ところ狭しと置かれています。

奥へ進むと、そのうちの一角は昔の教室の姿で復元されています。整然と並べられた机や椅子には肥後守で削られた子どもたちの名前が残り、まるでタイムスリップしたような錯覚を覚えます。

戦時下で建てられた小学校

多米小学校の本校舎は、戦時下の昭和19年に建て替えられた珍しい校舎です。明治維新以降、昭和初期まで増え続けた学校建築は、昭和12年の日中戦争を境に建設を自粛、新設は原則禁止とされました。



昭和の風情を復元した展示室

そのような状況下で建設を可能にしたのは、ひとえに地元の人々の努力によります。建設費用や資材を自分たちで負担し、木材は裏の山から切り出してきたといいます。また、鉄が使用できなかったため、欄間のレールには竹を用い、戸車は陶器で製造しました。

その一方で、床板や天井の合板、小屋組みのトラス、それを支える柱と方杖、さらに窓枠に至るまで、ガラスを除くほぼすべてが木で作られ、館内は優しい雰囲気になっています。今となつては、塗装すらされなかったことも幸運でした。

一見すると、当時の木造校舎の規定に則つたありふれた学校建築でも、建設の背景や細部をつぶさに見ることで、独自の魅力を発見することができます。

このもうひとつの見どころは、机と椅子です。シンプルな継ぎ手で組み立てられ、椅子は曲線のついた座面を木製の釘で固定してあります。年月を経て丸みを帯びた姿は、民芸品のような美しさを湛えています。

小学校から民俗資料室へ

多米小学校本校舎は、開発の進んだ多米地区に新しい校舎が完成した昭和51年に役割を

終えました。そして2年後に、豊橋市美術博物館の民俗資料収蔵室及び収蔵庫として再利用されることが決まりました。

現在は土日のみ開館し、季節に応じて餅つきなどのイベントも行われています。それを開催するスタッフの多くが、旧多米小学校の卒業生たちです。

かつて新校舎を建てた人々の子どもたちは、思い出深い校舎の新しい活用方法を今も模索し続けています。



机と椅子。民芸品のように美しい

1944年(昭和19年)

木造平屋建て

「設計」不明

豊橋市多米町字滝ノ谷34-1-1

https://www.toyohashi-bihaku.jp/?page_id=224

※土日のみ開館



出窓の構成。教室内により多くの光と空気を採り込む工夫

photo:nawoko kato

豊田市藤岡民俗資料館 (旧藤岡中学校特別教室棟)

木造カーテンウォールの、旧特別教室棟



外観。玄関ポーチは後年の増築部

出窓と採光

のどかな街並みを走る県道を脇道に入ると、丘の上に文化施設の集まる藤岡コミュニティ広場があります。その片隅に赤い瓦屋根に下見板張りの藤岡民俗資料館がたっています。この建物は以前、裁縫室や理科室、調理室を備えた藤岡中学校の特別教室棟でした。傍らに残る古い門柱はその名残です。

外観をよく見てみると、大きく開けられた窓が出窓になっていることに気がつきます。採光と換気のために作り付けられたもので、建物から45センチ張り出し、高さは2・1メートル、大きい方は幅7・2メートルもあります。また、出窓間に設けられた非常口上部の軒裏には木製の換気窓が開けられています。出窓は教室棟の構造から離れていて、これは近代建築で発達したカーテンウォールと同じ考え方と見ることが出来ます。乳白色のガラス窓から採り込まれた光は教室内で拡散し、柔らかな光を室全体に届けています。

特別教室の歴史

特別教室は、学校に求められた時代性が



廊下側も窓が多く明るい

現れています。裁縫室は女子の就学率を上げる目的で設けられ、また理科室は、第一次世界大戦後に科学力の向上を目的として施設が進んだといわれています。そのほか、唱歌室も軍歌の普及にあわせて設置された特別教室です。その一方で、畳敷きが多かった裁縫室は、地域の人々の集いなどにも用いられました。また理科室は、理科準備室と暗室がセットで設けられましたが、暗室はほとんど使用されず、科学系のクラブの部屋になる場合も多かったといえます。

西三河の民俗資料

藤岡民俗資料館は展示品も見どころのひとつです。窯業や養蚕の古道具や、街の歴史を紹介するパネルが隙間なく展示されています。

中でも興味深いのが、旧準備室の献馬用の標具と棒の手の展示です。藤岡は古くから、豊作に感謝し豪華に飾られた献馬と、剣術や棒術を元にした伝統芸能の棒の手の演技を猿投神社に奉納してきました。それら尾張から伝わった古い習わしの資料を目的に、遠方からも来館者が訪れています。

藤岡民俗資料館は、平成8年の改修工事の折に白いモルタル塗りの外観に変更されましたが、同26年には元の下見板張りに戻され、傷んだ木製の窓枠もそのまま修理されました。

西三河の貴重な民俗資料を展示する資料館としては、古見がかつた現在の姿こそが、さわしい佇まいだと思います。



養蚕の道具の展示

1954年(昭和29年) / 1981年(昭和56年)増築
2014年(平成26年)改修
木造平屋建て
【設計】不明
豊田市藤岡飯野町井ノ脇40-1
<https://www.city.toyota.aichi.jp/shisetsu/bunka/shiryoushonokai/1006108.html>
※見学可。月曜日・年末年始は休館。



直線的な装飾の付く、賑やかな外観。「キ」の柱型が面白い

刈谷市郷土資料館(旧亀城小学校本館)

まちな名建築家が建てた、コンクリートの小学校校舎



玄関ポーチからの眺め

鉄筋コンクリートの校舎

旧亀城小学校本館は、大正から昭和初期にかけて刈谷で活躍した建築家大中肇の代表作です。当時としては珍しい、鉄筋コンクリートで建てられた校舎です。

鉄筋コンクリート造は大正12年の関東大震災をきっかけに脚光を浴び、東京では原則化されましたが、地方では普及が遅れていました。

建築家大中肇と刈谷

愛知県営繕課に勤めていた大中は、刈谷町立高等女学校の校舎を担当した後に職を辞し、同地で設計事務所を構えました。大正13年のことでした。その頃の刈谷は、豊田紡織の大規模な工場誘致に成功して活気づいていました。

大中は営繕課時代で得た知識と経験を生かし、刈谷を中心に西三河地方で多くの建物を設計しました。中でも鉄筋コンクリート造の建物を多く手掛けた業績は大きく、今も上天温泉などが現存しています。

亀城小学校

亀城小学校は、旧刈谷城の堀が入り込んだ複雑な敷地にあり、新校舎には規模が大きいても重層できる鉄筋コンクリート造が選ばれ



昭和コレクションの展示室

ました。その決定には、工場誘致でも陣頭指揮をとった大野一造町長が関わったといわれています。

大中は鉄筋コンクリートの壁面を二色で塗り分け、ユニークな線形で飾って、楽しい外観をつくり上げました。正面の玄関ポーチにはペディメントと柱型を崩したような装飾が付き、ゆるいアーチが出迎えてくれます。また左右対称の本館は両隅の翼部を大きく張り出しているため、迫力のある構成になっています。2階の「キ」の柱型と大きな窓のリズミカルな配置が庭の植栽と合わさって、異国情緒の漂う明るい表情をつくっています。

おもちゃ展示とワークショップ

一時は取り壊しが検討された亀城小学校本館ですが、地元の人々の尽力で昭和55年に刈谷市郷土資料館として生まれ変わりました。近年リニューアルされた展示室では、刈谷城の模型をはじめ、刈谷の教育に関する資料が展示されています。

とりわけ人気なのが、昭和のコレクションのおもちゃの展示です。展示棚には懐かしいメンコやソフトビニールの怪獣などが展示され、これを目当てに来館する人も多いといえます。



展示されたおもちゃたち

1928年(昭和3年) / 2011年(平成23年)耐震改修
鉄筋コンクリート造2階建て(小屋組みなど木造)
【設計】大中肇

刈谷市城町1丁目25番地1

<https://www.city.kariya.lg.jp/shisetsu/bunkashiminokouyuu/kyodoshiryokan/>
※見学可。月曜 祝日 年末年始は休館。